朝日新聞　2009年（平成21年）3月19日　木曜日　13版

死への心構え 共に考えよう

八王子の内田さんが「死生学研究会」

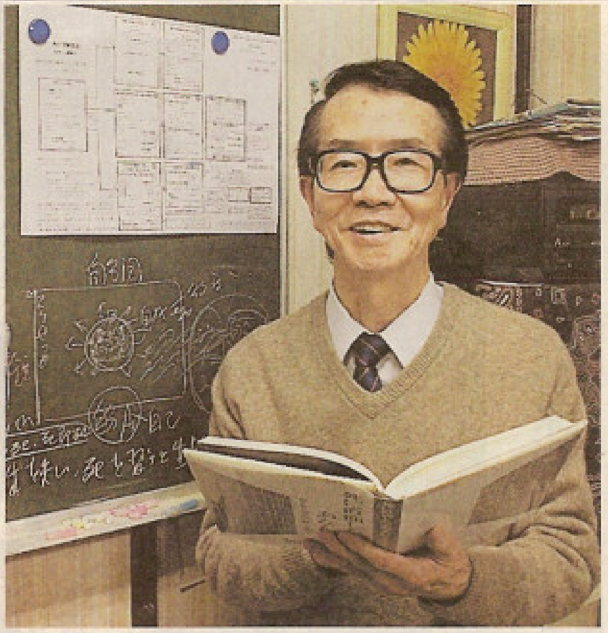
いのち

「命尊重の心を」

年3回セミナー、21日も

生と死の問題を考える民間の団体「死生学研究会」が、八王子市にある。代表は、約40年前に天文台の技官から転じて死について考えてきた内田誠さん(67)。本業の学習塾経営のかたわら特定の宗教に依拠せず、中学生でも理解できる易しい哲学として説く。「死への心構えができれば、命の貴さが分かる。それが今を懸命に生きることにつながる」と話している。

（岩城興）



「死生学研究会」代表の内田誠さん。手にしているのは自著「死に直面したあなたに」＝八王子市

アカデミー賞の受賞で映画「おくりびと」が評判になっている。遺体を棺（ひつぎ）に納める納棺師の主人公は様々な死に向き合うなかで、愛の姿、人の生を見つめ直す。「死への不安を軽くしたい」と、年3回のセミナーを開催している内田さんは、にわかに始まった「おくりびとブーム」を「若い人たちが死を考えるきっかけになる」と歓迎する。

内田さんによると、日本は西洋やイスラム世界のような宗教的な素地が一般に乏しく、死を意識から遠ざけようとする傾向が強いという。

「無差別殺人など悲惨な事件が相次ぐのは、死を真正面からとらえず、生を尊ぶ気持ちが薄くなりがちなのが一つの理由なのでは」

死の恐怖経験

内田さん自身、死の恐怖にとりつかれた経験を持つ。

最初に死を意識したのは8歳の時。四つ下の弟が疫痢で亡くなった。

夏休みを控えた7月の午後。野辺送りの鐘がかんかんと鳴り響くなか、弟は埋葬された。号泣する母の姿、死の床に伏せっていた弟の「死んだら、のうのうかんじ（仏様）になるんだ」との言葉……。心の傷として残った。

19歳の時、体調が急激に悪化し、激しい血便に襲われた。誰にも打ち明けられず、がんだと思いこんだ。8歳の時の記憶が恐怖となって自分を覆い、死におびえつつ仏教書や哲学書を読みふけった。

結果的に大きな病気ではなかったが、苦悩のなかで会得したのが、自分の理想、喜びや悲しみなどを意識から捨て去ることだった。そうすることで他人を思いやり、さらには周りのすべてを受け入れようという心が強くなり、死の不安を乗り越えられたという。

元は東京理科大学で物理を学んだ。30歳を前に勤務していた東京天文台（現国立天文台）を辞め、日大文理学部（通信）で哲学などを修めた。学習塾で子どもたちを教えながら哲学や宗教、医学など様々な本を読み、生と死の問題を考えてきた。

分かりやすく

その成果を06年暮れ、自費出版の著書「死に直面したあなたに　死生学と死生観の確立を願って」にまとめた。「五郎」の名で登場する内田さんが自身の体験を交えつつ、哲学者、宗教家らの思想を紹介していく内容だ。

さらに昨年4月、死生学研究会を立ち上げ、「分かりやすく、より多くの人に死への不安を解消してもらえれば」とセミナーを始めた。「死別の悲しみ」や「死生観の確立」などをテーマにしてきた。

内田さんは「人はいつか死ぬという意味で、誰でも死に直面しています。セミナーが医療関係者や、いじめなどの問題に取り組む先生にも参考になれば」と話している。

◇

次回のセミナーは21日午後1時半、午後6時からの2回、八王子市東町の市クリエイトホールで。市教委後援。参加無料。申し込み・問い合わせは内田さん（042・624・1355）。

各界著名人が発想術伝授

来月7日からアエラビジネスセミナー

週刊誌「AERA」は、4月から毎週火曜、一線で活躍するビジネスパーソンを対象に、各界の著名人12人を講師に招いたセミナーを開講します。新時代に必要となる、発想術やスキルを伝授します。

◇午後7時～8時30分、千代田区丸の内2の5の2　三菱ビル「コンファレンススクエア　エムプラス」　参加料1回5千円

◇4月7日　榊原英資氏／4月14日　藤原帰一氏／4月21日　小林陽太郎氏／4月28日　渋井真帆氏／5月12日　安斎隆氏／5月19日　國貞克則氏／5月26日　次原悦子氏／6月2日　姜尚中氏／6月9日　勝間和代氏／6月16日　ぐっちーさん／6月22日（月）　新浪剛史氏／6月30日　藤田晋氏

◇申し込みは朝日カルチャーセンター・新宿のホームページ（http://www.asahiculture-shinjuku.com/）、または電話03・3344・1945。（朝日新聞出版主催、朝日カルチャーセンター共催）